宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書
第70集

広　野　廃　寺（広野町東裏111−1）
東　中　遺　跡（菟道段ノ上20−1他）
宇治市街遺跡（宇治若森23−10）

2008

宇治市教育委員会

序

宇治市の文化財には、世界遺産の平等院や宇治上神社といった平安時代の宇治を彷彿とさせるものが数多く残り、古典文学の最高峰『源氏物語』の「宇治十帖」では、その名の通り宇治が舞台ともなっています。本市ではこれまで、そうしたいにしえの香り漂う風土を元に、「源氏物語のまちづくり」をテーマとして都市計画に取り組んできました。さきの平等院のように現存する建築物以外にも、宇治の歴史的・文化的景観を支えているものとして、お茶摘みや宇治川の鵜飼いといった古来の伝統的な風景も重要です。

また、最近の宇治市街遺跡の発掘調査成果からは、宇治の地下に眠る平安貴族の別荘跡や古墳時代でも最古級の須恵器が出土したことが話題となりました。昨年、宇治川沿いにある乙方遺跡の発掘調査で偶然発見した太閤堤の一部が、新聞・テレビなどのメディアでも大きく取り上げられたことも、記憶に新しいのではないでしょうか。こうした発掘調査の積み重ねによって、宇治の過去の姿が次第に明らかになりつつあります。

今回の発掘調査の成果は、本書に詳しく述べたところですが、広野町の広野廃寺では南端の溝と塀の柱列を確認し、菟道の東中遺跡では宅地跡が発見されました。

末筆になりましたが、発掘調査の実施や報告書の作成にあたって、ご理解とご協力をいただいた関係各位に心より謝意を表します。

平成20年３月

宇治市教育委員会
教育長　石　田　　肇

例　言

1．本書は、宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書第70集である。

2．本書収録の遺跡は、平成19年度に本市教育委員会が実施した発掘調査、計３件である。

3．本書で使用する座標は、ＩＴＲＦ（国際地球基準座標系）に準拠した世界測地系国土座標第Ⅵ系を用い、地図中で方位記号の指し示す方角は、座標北である。また、高さの基準面には、東京湾平均海面（Ｔ．Ｐ．）を用いた。

4．本書の土層色調表記は、小山正忠・竹原秀雄偏『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・日本色彩研究所色標監修）第24版（2002年度）に従った。

5．本書収録の航空写真は有限会社ウイングに、遺物写真は寿福写房に委託した。

6．本発掘調査事業に関係する機関・体制は、下記の通りである。

発掘調査主体者	宇治市教育委員会		
発掘調査責任者	宇治市教育委員会	教育長	石田　肇
発掘調査事務局	同　歴史資料館	館　長	吉水利明
発掘調査担当者	同　文化財保護係	係　長	杉本　宏
	同	主　査	荒川　史
	同	調査員	永野宏樹
	同	調査員	横田真吾
発掘作業委託	ＮＰＯ法人文化財支援センター		
	同	発掘技術員	河野凡洋
	同	計測技術員	吉岡真史
	同	作業員長（広野廃寺）	鎌田利幸
	同	作業員長（東中遺跡）	石山　淳
	同	作業員長（宇治市街）	小原信利

7．本書収録遺物の実測・製図は、下記の者が行った。
井口章代、加藤さやか、北澤英子、澤口結希、辻　菜摘、山村沙奈美、横田真吾

8．本書の執筆は、AのⅠ－３を河野凡洋（ＮＰＯ法人文化財支援センター）、AのⅢを河野と横田真吾、CのⅢを永野宏樹が行い、その他は横田が執筆した。

9．本書の編集は、宇治市歴史資料館文化財保護係が担当し、実務を横田真吾が行った。

	遺跡の名称	調査地	調査原因	経費負担者	調査期間	調査面積
A	広野廃寺	広野町東裏 111－1	宅地造成	株式会社 拓伸	平成19年 10月2日～11月19日	540㎡
B	東中遺跡	菟道段ノ上 20－1他	共同住宅建設	医療法人 栄仁会	平成19年 7月24日～8月21日	700㎡
C	宇治市街遺跡	宇治若森 23－10の一部	道路・住宅建設	株式会社 平安建設	平成19年 5月17日	25㎡

本　文　目　次

A．広野廃寺（広野町東裏 111 － 1）発掘調査報告

Ⅰ．はじめに
1 報告の目的 …… 1
2 調査にいたる経過 …… 1
3 調査の経過 …… 1
Ⅱ．地理的・歴史的環境
1 広野廃寺の地理的環境 …… 3
2 広野の歴史的環境 …… 3
3 既往の調査 …… 4
Ⅲ．調査の成果
1 検出遺構 …… 5
2 出土遺物 …… 11
Ⅳ．まとめ …… 14

B．東中遺跡（菟道段ノ上 20 － 1 他）発掘調査報告

Ⅰ．はじめに
1 報告の目的 …… 17
2 調査にいたる経過 …… 17
3 調査の経過 …… 17
Ⅱ．地理的・歴史的環境
1 東中遺跡の地理的環境 …… 18
2 菟道の歴史的環境 …… 18
Ⅲ．調査の成果
1 検出遺構 …… 19
2 出土遺物 …… 19
Ⅳ．まとめ …… 20

C．宇治市街遺跡（若森 23 － 10）試掘調査報告

Ⅰ．はじめに …… 21
Ⅱ．地理的・歴史的環境 …… 22
Ⅲ．調査の成果 …… 22
Ⅳ．まとめ …… 22

挿図・表目次

A．広野廃寺

第１図　調査地位置図…… 2
第２図　創建期軒丸瓦…… 4
第３図　既往の調査地…… 4
第４図　遺構全体図…… 6
第５図　南限溝と柱穴列…… 7
第６図　柱穴列平面・断面図…… 8
第７図　瓦溜り２検出状況…… 9
第８図　瓦溜り１・２完掘状況…… 10
第９図　拡張部西壁断面図…… 14
第10図　寺域復元図 …… 15
第１表　瓦集計表…… 16
第２表　掲載遺物一覧表…… 16

B．東中遺跡

第１図　調査地位置図…… 17
第２図　出土遺物…… 20

C．宇治市街遺跡

第１図　調査地位置図…… 21

図面図版目次

A．広野廃寺

PL. 1　トレンチ配置図
PL. 2　遺構平面図
PL. 3　土層断面図
PL. 4　軒丸瓦
PL. 5　丸瓦
PL. 6　丸瓦
PL. 7　平瓦
PL. 8　平瓦
PL. 9　平瓦
PL. 10　土器・石器・鉄器

B．東中遺跡

PL. 11　トレンチ配置図
PL. 12　遺構平面・土層断面図

C．宇治市街遺跡

PL. 13　トレンチ配置と遺構平面・断面図

写真図版目次

A．広野廃寺

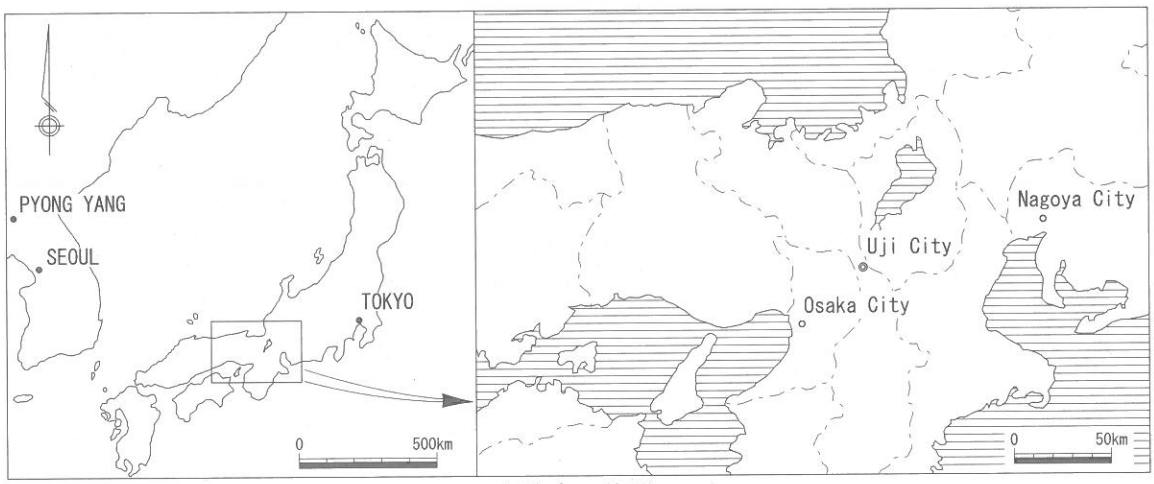
PL. 14　空撮と調査前
PL. 15　調査地全景
PL. 16　拡張部
PL. 17　瓦溜りと雨落ち溝
PL. 18　塀柱穴
PL. 19　土層堆積状況
PL. 20　遺物出土状況
PL. 21　作業風景
PL. 22　作業風景と調査後
PL. 23　軒丸瓦
PL. 24　丸瓦
PL. 25　平瓦
PL. 26　土器・石器・鉄器

B．東中遺跡

PL. 27　遺跡からの遠望と調査前
PL. 28　検出状況
PL. 29　完掘状況
PL. 30　作業風景
PL. 31　作業・参加者・遺物

C．宇治市街遺跡

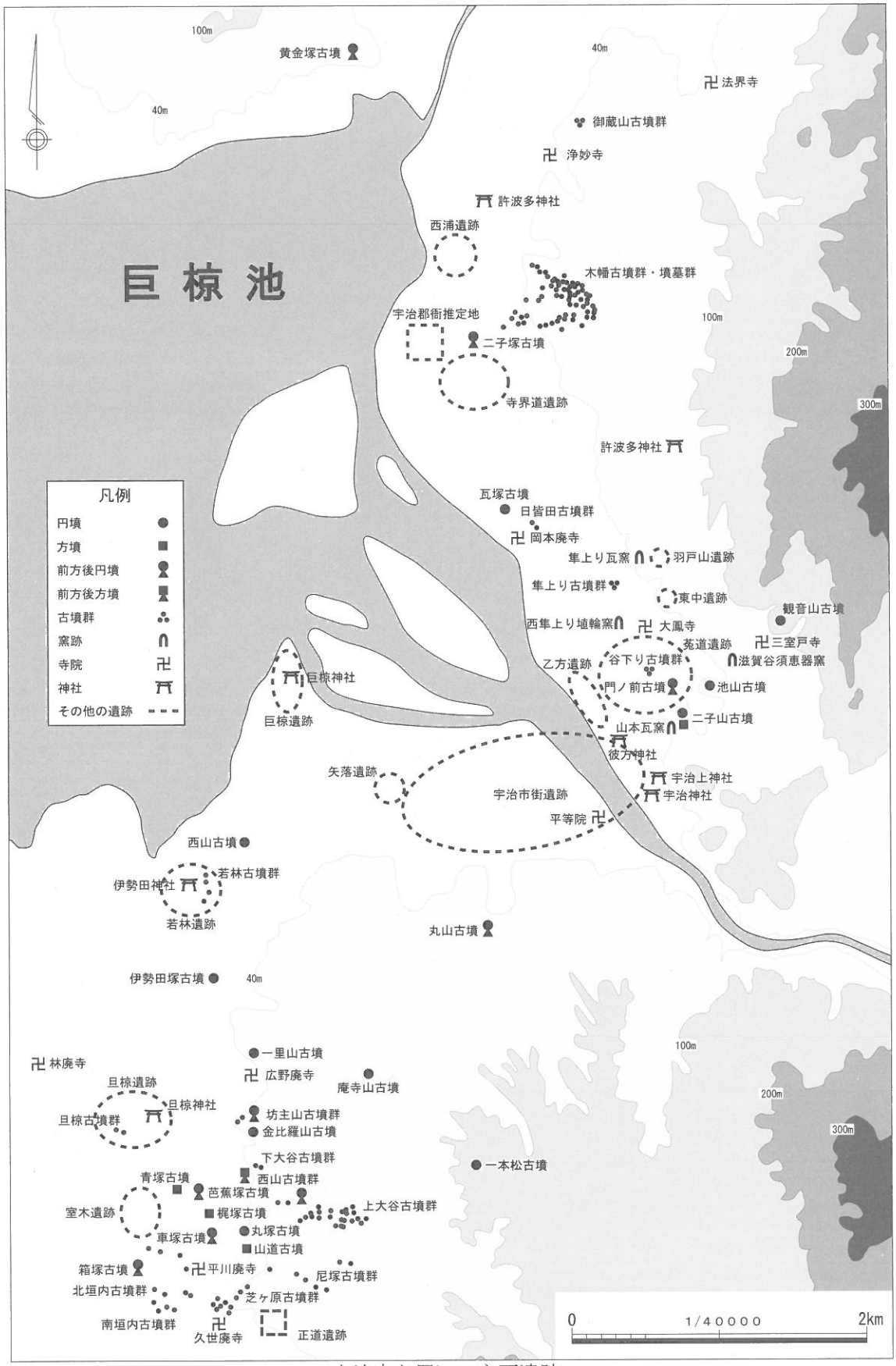
PL. 32　調査地とトレンチA・B



宇治市の位置

作図にあたっては、昭和55年７月測図、平成２年２月修正の宇治市全図１（1/10000）を改変して用いた。

本書所収の遺跡位置図



宇治市と周辺の主要遺跡

A. 広野廃寺(広野町東裏 111 - 1)発掘調査報告

Ⅰ．はじめに

1　報告の目的

本発掘調査報告は、宇治市広野町東裏111－1で計画された宅地開発に先立ち、宇治市教育委員会が実施した発掘調査の内容と成果を報告するものである。

2　調査に至る経過

平成19年6月12日付で株式会社拓伸代表取締役山本衡嗣より、広野廃寺の範囲内にある上記の地番において、文化財保護法第93条第1項の規定に基づき、宅地造成を行う旨の埋蔵文化財発掘の届出書が提出された。当該地に北接する広野町東裏110番1で平成2年度に行った発掘調査では、広野廃寺西端の溝が見つかっている。平成2年度の発掘調査概要報告書に掲載された広野廃寺の寺域復元図（宇治市教育委員会1991）によれば、当該地は寺域のほぼ南端にあたり、以前より門や塀、溝といった遺構の存在を考えていた。調査前の現地は、畑地と宅地であった。開発範囲は盛土するため、遺構損壊のおそれは無かったが、埋没遺構の内容確認のため、道路範囲に限定して発掘調査を実施した。

3　調査の経過

現地調査は、平成19年10月2日から開始した。調査地が道路建設予定地にあたり、調査区の設定は、当初の予定では南北6ｍ東西91ｍであったが、東側に井戸があり、作業用道を確保するため、東西を73ｍと短縮した。先述の通り、今回の調査地は、広野廃寺西端の溝や地形などから復元すると、寺域南端にあたるため、南門や側溝などが検出される可能性があった。

調査はまず、重機によって東側から掘削を始めた。地山面は、東側から中央にかけて一旦低くなるが、中央よりやや西側から西へ向かって隆起していく。地表面から掘削し、西側では1.1m、東側では1.8mで地山面に達した。遺構は全てこの地山面で検出しており、西側では遺構がほとんど検出されず、多くは中央西寄りから検出されている。重機掘削は、3日間で終了した。測量の基準点は、10月4日よりＧＰＳ測量によって調査地南側と西側に2点を設定した。

遺構検出作業は、調査地の東から西へと順次進めた。その結果、土坑やピット、溝などが検出された。ほとんどの遺構は、調査地の北半分にあり、大部分は調査区外側の調査範囲外に入っていた。10月17日より遺構掘削作業も東から西へと行った。調査区壁面の土層観察からは、版築や整地した痕跡などは検出されず、伽藍と考えられるような遺構も確認できなかった。しかし、その後、検出時には複数の土坑が重なっていると考えていたものが、壁側を断ち割った結果、一つの溝であると判明した。この溝は、ほぼ真東西方向に向かっており、出土遺物は飛鳥時代から奈良時代のものに限られていることや、調査前からこの付近が広野廃寺の南端と推定していたことによって、この時点で寺域南限側溝の可能性を考えた。

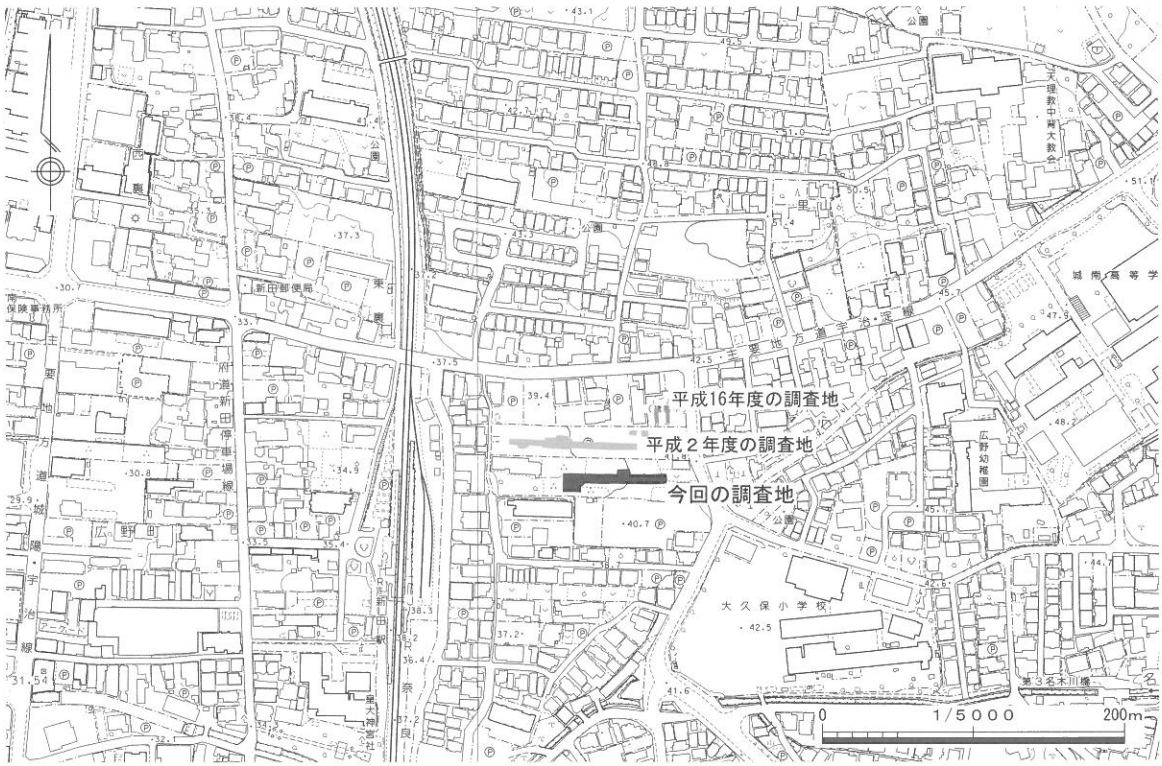
検出された遺構をほぼ掘削し終えた11月5日の段階で、先述した溝幅の確認と、その溝が寺域南限側溝であった場合、近傍の南門や塀、建物などの存否を確認するため、調査地中央やや東寄りの部分で、調査区を北へと拡張することにした。拡張部の規模は、南北5ｍ、東西8.5ｍである。拡張部の平面検出作業により、溝の西側部分で南北幅を確認することができた。

その他、11月8日に拡張部では中央を東西に並ぶ3基の柱穴が検出された。これらは、南側の東西方向溝とほぼ並行していた。調査地南半分で遺構が検出されないことや、築地の痕跡がないことから、これらの柱穴とそれに並行する南側の溝は、広野廃寺南端を画する掘立柱塀の柱穴列と寺域南限の側溝と判断した。また、西側の壁面を観察すると、その下部南方で堅緻な褐色土と黄褐色土が交互に水平堆積している状況が見られ、南門の基礎部分である可能性を考えた。

拡張部では、そのほぼ中央にある掘立柱塀の柱穴が南北方向溝の埋土を掘り込んでいる可能性を考えたが、断ち割りの結果、溝は柱穴の北側で終わり、柱穴列は基本的に地山を掘り込んでつくられていることがわかった。検出時、南北方向の溝は南限の溝に掘り込まれていると判断していたため、南限側溝の北側を一部掘り過ぎてしまうという結果となった。

また、拡張部では、広野廃寺との関係が不明な土坑やピット、溝を地山上で検出した。それらの掘削後、一部土層観察用のアゼを残し、11月15日に全景の写真撮影とラジコンヘリによる空中撮影を実施した。その後、アゼを完全に掘削し、南限側溝など遺構細部の写真撮影をおこなった。平面及び壁面の土層断面の測量作業は適宜おこなった。

作業員による掘削作業は、11月17日に終了し、機材の撤収作業を始めた。その後、重機により調査区を埋め戻し、11月19日に全作業が終了した。



第１図　調査地位置図

Ⅱ．地理的・歴史的環境

1　広野廃寺の地理的環境

広野廃寺は、三軒谷川と名木川が開析した谷の緩斜面東側に位置している。斜面は北東から南西へと徐々に下がっており、かつて東の丘陵上から流れてきた三軒谷川は、現在の城南高校北側を通過したのち広野廃寺の南方を流れ、名木川と合流していた。また、三軒谷川の北側には、東方より一里山の尾根が自衛隊駐屯地方面へと伸びており、その南斜面の傾斜が緩やかに変わるところに広野廃寺が存在する。こうした平坦地を選んで寺院が造営されたのであろう。

2　広野の歴史的環境

広野においては、弥生時代以前における人間活動の痕跡が明らかでない。わずかに**一里山遺跡**が、弥生時代の集落と考えられる程度である（田辺 1973）。

古墳時代になると、**八軒屋谷遺跡**で前期の集落が想定されているほか、竪穴式石室より鏡や玉、鉄器を出土した**一本松古墳（円墳 規模不明）**が築かれる。その次代のものには、円筒埴輪に加え、蓋や靫、家といった豊富な形象埴輪をもち、主体部から鏡や農工具、刀、剣などが検出された**庵寺山古墳（円墳 56 m）**やそれとほぼ同じ頃の**金比羅山古墳（円墳 52 m）**がある。

また、円筒埴輪列からその存在が知られる**一里山古墳（円墳 規模不明）**の東で前期の埴輪が出土していることから、**一里山東１号墳（墳形 規模不明）**が推測されている（鐘方 1985）ほか、先述した一本松古墳の南側丘陵頂部にある隆起は、**一本松南古墳**となっている。

古墳時代中期の遺構には、一里山遺跡にカマドを伴う竪穴式住居が存在し、そのほか飛鳥・奈良時代の土器や掘立柱建物も出土していることから、一里山丘陵一帯では、弥生時代より幾度かの断絶はあるものの、奈良時代頃まで人々が生活していたと考えられる。

後期になると、金比羅山古墳のすぐ北に**坊主山古墳群**が造営される。最初に築かれた木棺直葬の１号墳（前方後円墳 45 m）は、大刀の杷外部より三輪玉が並んだ状態で出土したことで有名である。１号墳より新しい２号墳（円墳 25 m）は、木棺２基が東西に直葬され、東棺からは鉄鏃などが、西棺からは須恵器、大刀、鉄鏃などが出土している。３号墳（円墳？５m）は、詳細が不明なものの、東から１、２号墳と造墓が続いていることから、最も新しいかもしれない。

飛鳥時代の前半には、須恵器や石材の伝承より**一里山東２号墳**が存在したというが、詳しいことはわからない。飛鳥時代の中頃より広野廃寺の下層、**広野遺跡**では集落が飛鳥時代後半まで営まれていた。その他、広野遺跡では大久保小学校建替時の調査で居館にともなうと見られる溝が見つかっている。一里山丘陵の南裾には、広野廃寺創建期の軒丸瓦など大量の瓦を出土したという瓦窯が知られるものの、詳しい場所や現状はわからない。

奈良時代には、蔵骨器そのものは確認できていないが、凝灰岩製の方形外容器を出土した**八軒屋谷古墓**が造られる。これも位置など詳しいことは不明である。

3　既往の調査

A．発掘前史

「昭和19年8月、京都大学考古学教室の一行が宇治市広野町庵寺山古墳の調査を実施し、その一行の中に宇佐晋一氏も参加されていた。調査の帰路に2ヶ所より布目瓦を見つけられ、後日木村捷三郎氏の宅に持参、かなり古い時代に属することがわかり、寺院跡ではないかと注意を引く所となり、広野廃寺と呼ばれていた。」（粟野1990）これが、広野廃寺発見の顛末である。

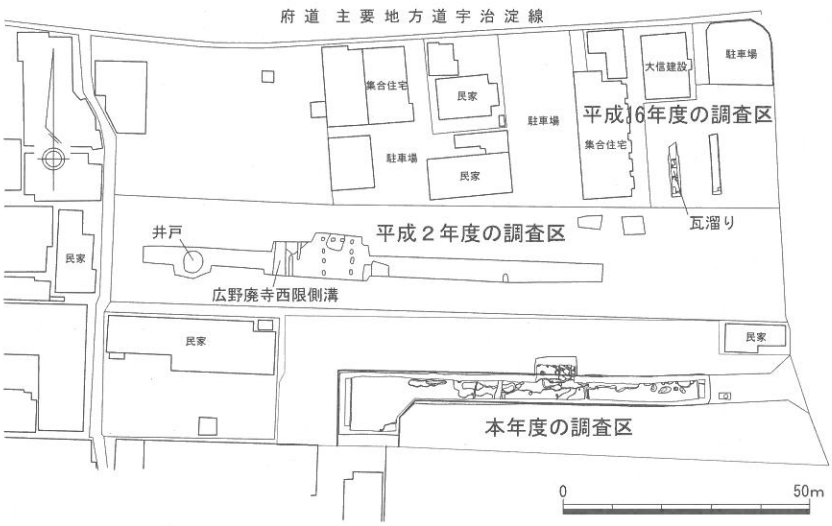
その後、昭和29年（1954年）、現在の主要地方道宇治淀線の舗装工事中に大量の瓦が出土した。その中より採集された広野廃寺創建期の複弁八葉蓮華文軒丸瓦は、過去に出土したものの内で唯一、瓦当面のほぼ全周が残る（第2図）。

第2図　創建期軒丸瓦

B．発掘略史

広野廃寺の発掘調査は、昭和42年（1967年）に山田良三氏を中心にして京都府立城南高等学校地歴部が、東裏110番地で行ったことに端を発する（第1次調査）。この時には、遺構は検出されず、その後昭和46年（1971年）、再び山田氏を含む宇治市史編纂委員会によって行われた発掘調査（第2次調査）で、平瓦の堆積層と建物跡と推測される性格不明の柱穴群が見つかっているが、寺域や中心伽藍の構造についての手がかりは得られなかった。

当地における本格的な発掘調査は、平成2年（1990年）に本市教育委員会が行った広野廃寺の範囲確認を主たる目的としたものである（第3次調査）。この調査では、寺域西端の溝や寺域内の掘立柱建物跡のほか、寺域外やや西より井戸跡を検出し、その内部から出土した土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦などの遺物によって、広野廃寺は8世紀後半頃に廃絶したことが明らかとなった。最近では、本市教育委員会が平成17年（2005年）に試掘調査を実施し、瓦溜りが見つかった（第4次調査）が、寺院の主要伽藍については依然不明なままであった。



第3図　既往の調査地

Ⅲ．調査の成果

1　検出遺構

検出した遺構は、広野廃寺関連のものと、寺院廃絶後のもの、寺院関連以外ないし性格不明のものの大きく分けて３種類あるが、多くは広野廃寺関連の遺構である。ここでは、調査地の基本層位と主要な遺構について、順番に述べていく。

A．基本層位

本調査での基本層位は、東西に長い調査区であったものの東西でほぼ同様である。上層より、現代の整地土層、近代耕作土層、洪水堆積土層、耕作土層、地山の順になっていた。地山は東西で異なり、東は黄褐色土、西は赤褐色土であった。また、地山はトレンチ東側から中央にかけて徐々に下り、中央から今度は西側へ隆起していた。遺構は、全て地山面から検出された。

洪水堆積土層は、調査区東壁を見ると北から南へ向かって急激に下がって厚みを増し、東から西に向かっては、徐々に薄くなる。耕作土層は、北側壁面では階段状に東から西に下がる様子が観察されたが、南側壁面では平坦であった。この堆積は、整地された様子が窺えなかったことや、この層から遺構が検出されないこともあり、洪水層が堆積する以前に段畑があったが、それが洪水によって削られてこの様になったと考えた。

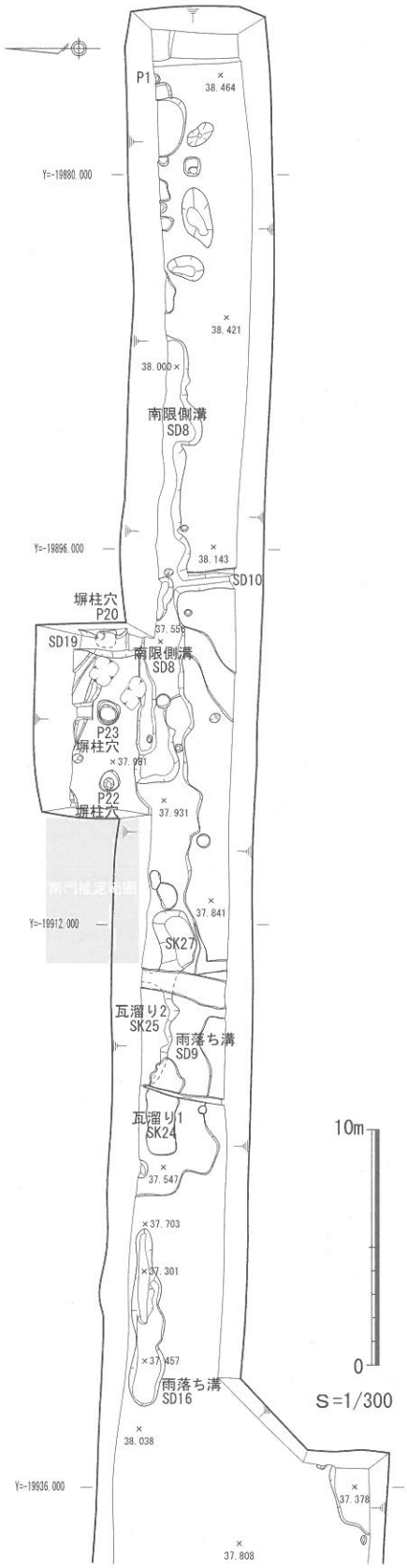
南限側溝など、ほとんどの遺構は、調査区北側に入り込んでおり、北側に寺院関連の遺構が予想されたため、調査区を拡張した。拡張部での層序も、先述したものと基本的に変わらない。ただし、西壁の地表面から下へ1.0 mから1.5 mで褐色粘質土と黄褐色粘質土が５層水平堆積しており、硬く締まっていることから、これが南門基礎部分の可能性もある。拡張部東壁の同じ位置ではその状況はみえなかったが、Ｐ20の北側で黄褐色粘質土が盛り上がっている状況が観察されたことから、これは柱の支え土であった可能性がある。

平成２年度の調査では、標高38.00 m前後で整地土層が確認され、寺院関連の遺構が検出されている。今回の調査では整地土層が確認されず、遺構は標高38.00 m前後の地山面で検出された。今回の調査地は、地山が北側より高かったため、整地されなかったのであろう。

B．寺院関連の遺構

南限側溝　ＳＤ８　調査区中央東寄りで検出した東西方向の溝である。主軸は座標北より91度東偏する。長さ約14 m、幅約1.5～2.0 m、深さは約0.15～0.7 mを測る。検出時は複数の土坑群の可能性も考えたが、掘削時に土層を確認したところ、溝であることが判明した。溝西側の底面は、起伏があり、ＳＤ10との接点で深くなる。東側の底面は、やや平坦で南側の肩は膨らみがある。

また、溝の底面は、東から西へと緩やかに下がる。溝内から出土した遺物には、飛鳥から奈良時代の平瓦が多く、他に広野廃寺創建期の軒丸瓦や土師器、須恵器、鉄器がある。溝の長軸方向



第４図　遺構全体図

が、ほぼ真東西を向いていること、この溝と並行する拡張部の柱穴Ｐ 20・Ｐ 22・Ｐ 23 の存在と調査地南半部では遺構が僅少であることから、ＳＤ８を広野廃寺南端の側溝と考えた。

溝　ＳＤ９　ＳＤ８の西端と重なった状況で検出した東西方向の溝である。長さ約 18 m、深さ約 0.05 ～ 0.1 mで、調査区外へ続くため、幅は不明である。遺物は瓦、土師器、須恵器が出土している。埋土中にＳＫ 27 と瓦溜り１・２があり、溝の埋没途中か後にそれらの遺構が形成されたと考えられる。

拡張部の東西方向に並んだ柱穴Ｐ 20・Ｐ 22・Ｐ 23 の存在やＳＤ８を南限側溝と考えるならば、調査区よりも北側に伽藍関連遺構の存在が考えられる。ＳＤ８と同一線上で東西に長く、拡張部西壁土層の状況から、ＳＤ９は雨落ち溝と判断したが、異なる遺構の可能性も考えられる。

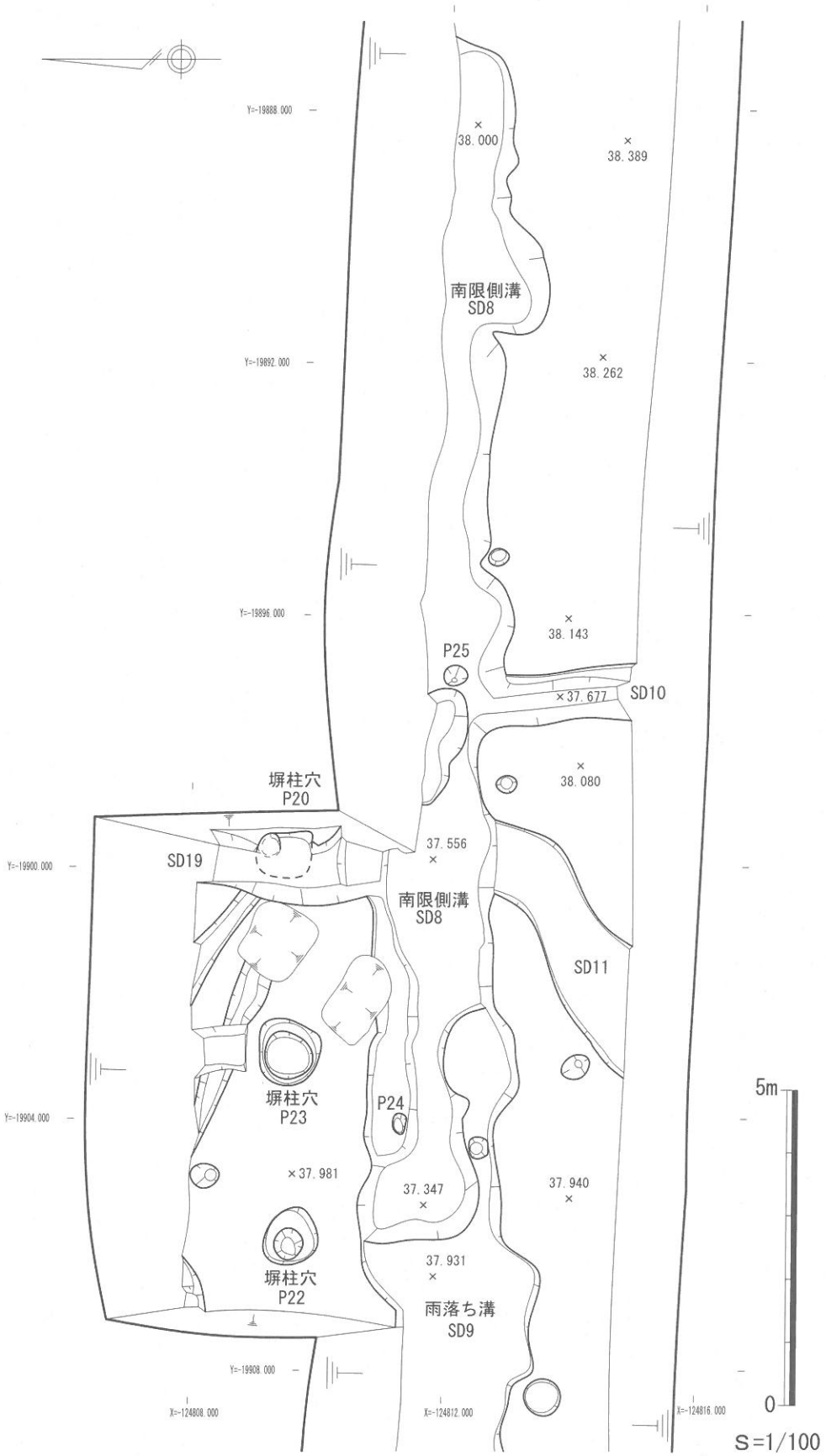
溝　ＳＤ 16　調査区西側にある長さ約 7.5 m、幅約 0.6 ～ 1.6 m、深さ約 0.1 ～ 0.35 mの東西方向の溝である。地山は西へ向かって隆起しているため、溝の底面西側は傾斜に沿って浅くなる。この溝もほぼ真東西に伸びていて、ＳＤ８・９の延長線上にあるため、雨落ち溝と考えられる。

土坑　ＳＫ 27　ＳＤ８の西側にある長さ約 2.2 m、幅約 1.1 m、深さ約 0.07 mの土坑である。西側上層にはＳＤ 13 があり、ＳＤ９がその他の部分の上層にある。ＳＫ 27 は、ＳＤ９が機能している時期に形成されたものと考えられるが、ＳＤ９の埋土とは質が異なるため別の遺構とした。この土坑は、西側にある瓦溜り２と近接しているため、瓦溜り２と同一遺構の可能性も捨て切れない。

柱穴　Ｐ 20　拡張部中央東寄りで検出された直径約 0.85 mの隅丸長方形の柱穴で、柱痕が残る。柱痕は直径約 0.35 m、深さ約 0.35 mである。地山とＳＤ 19 の埋土を掘り込んでいる。掘立柱塀柱穴と考えられる。

柱穴　Ｐ 22　Ｐ 23 の西側にある直径約 0.85 mの不整円形の柱穴で、柱痕が残る。柱痕は直径約 0.5 m、深さ約 0.3 mである。掘立柱塀柱穴と考えられる。

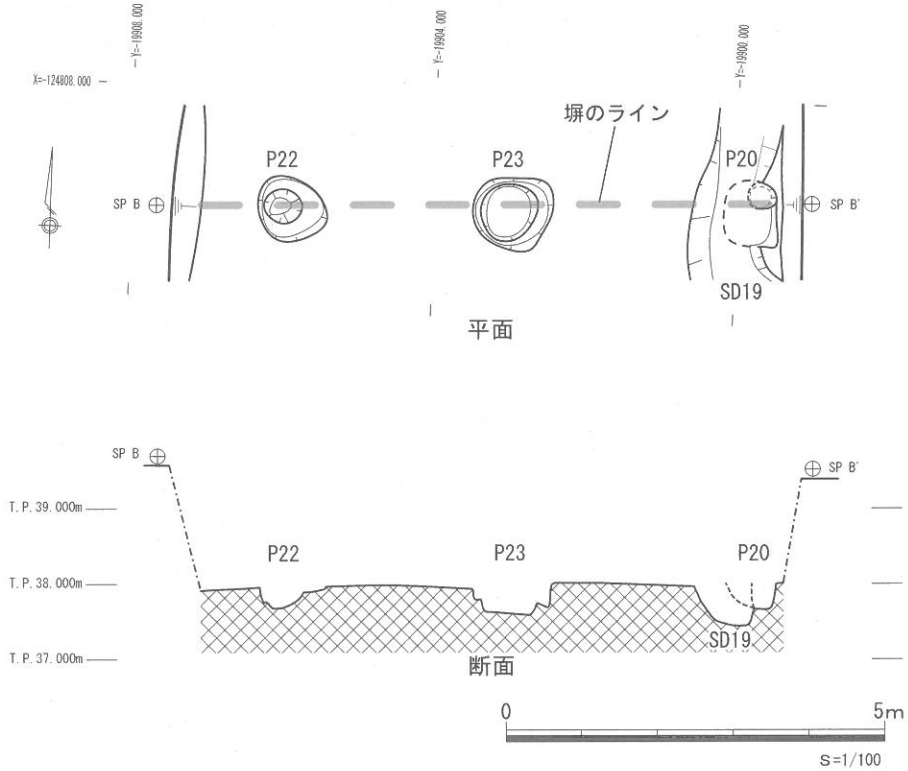
柱穴　Ｐ 23　Ｐ 20 とＰ 22 に挟まれた一辺１m前後の



第５図　南限側溝と柱穴列

隅丸方形の柱穴で、柱痕が残る。柱痕は直径約 0.7 m、深さ約 0.4 mである。掘立柱塀柱穴と考えられる。

Ｐ22･Ｐ23･Ｐ20は、南限側溝ＳＤ８と並行し、柱間約3.1mでほぼ直線上にある。そのことから、これらは広野廃寺南面の掘立柱塀を構成する柱穴列の一部と判断した。

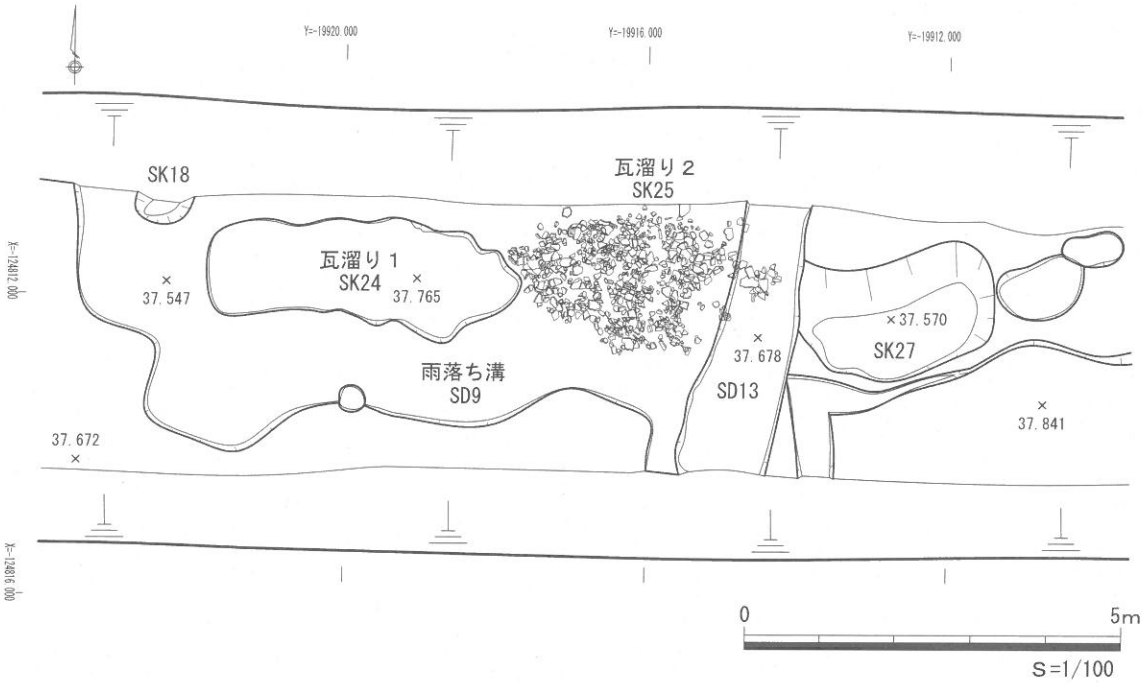


第６図　柱穴列平面・断面図

Ｃ．寺院廃絶後の遺構

瓦溜り１　ＳＫ24　ＳＤ９の埋土内で検出した長さ約 4.2 m、幅約 1.2 m、深さ約 0.2 mの瓦溜りである。出土した遺物のほとんどは、奈良時代の瓦であった。遺物組成が酷似する瓦溜り２と一連のものとも考えられるが、この底面はＳＤ 14 の底面まで達していない。ゆえに、瓦溜り２とは別の遺構であり、同時に埋まったのではなく、わずかではあるが、瓦溜り２より時期が遅れて瓦が落ち込んだのであろうと判断した。

瓦溜り２　ＳＫ25　ＳＫ 27 の西側で検出した長さ約 3.6m、幅約 2.0m、深さ約 0.1m の瓦溜りである。西側には瓦溜り１がある。出土遺物は、奈良時代の瓦が多いが、広野廃寺創建期の軒丸瓦も含み、土師器・須恵器もある。瓦取り上げ後の底面は、北側へ緩やかに下りながらトレンチ外へと入り込んでいくため、全体の幅は不明である。ＳＫ 27 の底面が東から上がってきている状況も考慮すれば、２つは一連の遺構の可能性も考えられる。そして、ＳＫ 27 と同様、雨落ち溝ＳＤ９が機能している間に流水や雨水の影響を受けて外形が造られた。この遺構は、広野廃寺廃絶に伴い、ここに瓦が落ち込んだ、ないし廃棄された結果である。その後、残りの瓦が瓦溜り２の西へ落ちたか廃棄され、瓦溜り１が形成されたと考えられよう。



第７図　瓦溜り２検出状況

D．寺院関連以外ないし性格不明の遺構

溝　ＳＤ 10　ＳＤ８の中央南側にある南北方向の溝である。幅は 0.65 m、深さ約 0.50 mで調査区外南側に向かって入り込んでいる。比較的整った形状をしており、西側は階段状に１段低くなっている。検出時および掘削時にはＳＤ８との明確な重複関係は見られなかった。遺物は、飛鳥から奈良時代の瓦・須恵器が出土している。

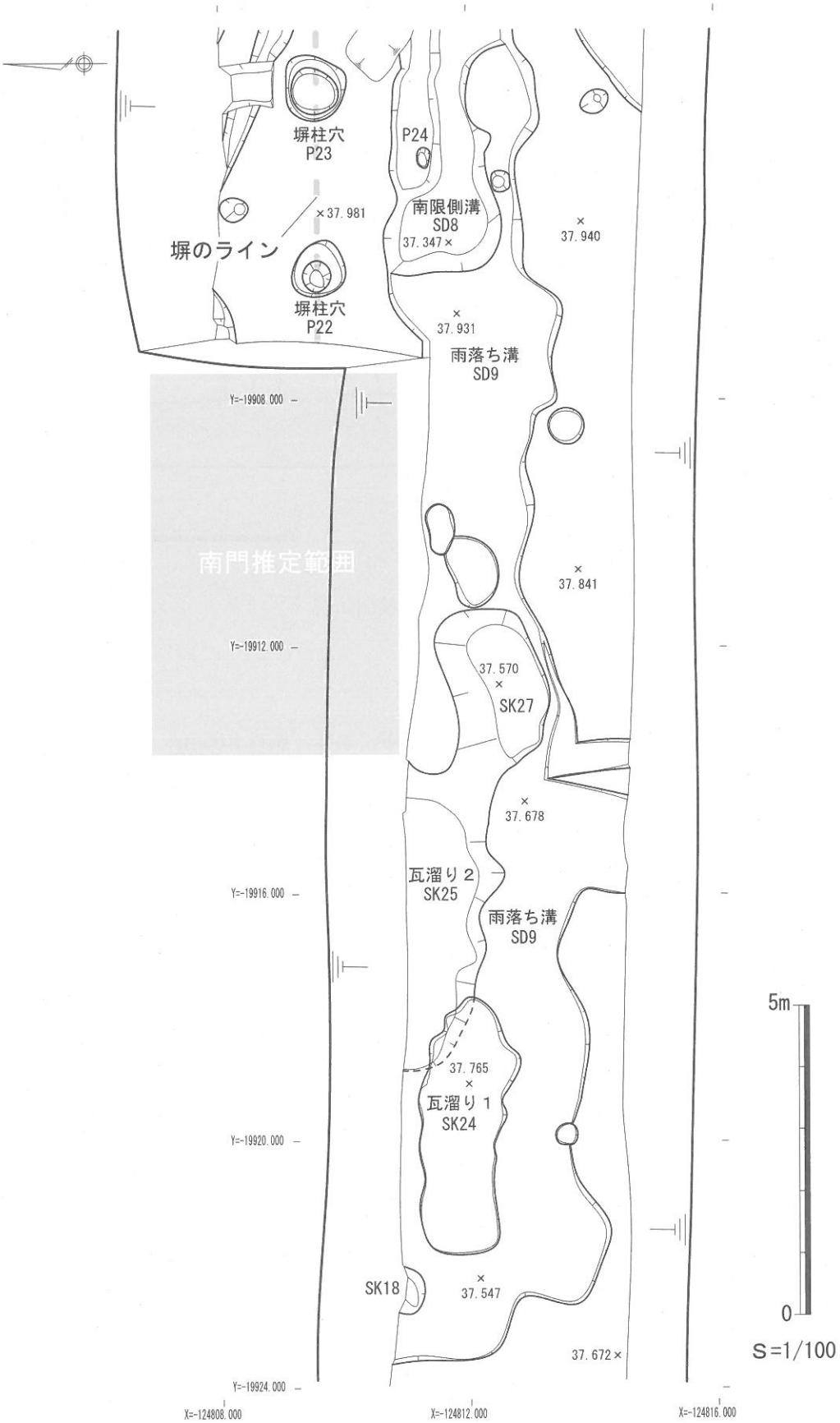
溝　ＳＤ 19　拡張部東端付近にあり、塀柱穴Ｐ 20 に埋土を削られた南北方向の溝である。幅は 0.7 ～ 1.0 m、深さ約 0.5 mで、長さは調査区外の北側へ伸びていくため、不明である。埋土が塀柱穴Ｐ 20 に削られていることから、広野廃寺創建以前の遺構であるのは間違いない。人為的な溝の可能性以外に自然流路とも考えられる。

土坑　ＳＫ 18　ＳＤ 16 東側の土坑である。直径約 0.75 m、深さ約 0.5 mで、調査区外北側に入り込んでいるため全体の形状は不明である。遺物は、広野廃寺創建期の軒丸瓦が出土している。ＳＤ 16 との位置関係や出土遺物から広野廃寺関連遺構の可能性がある。

不明　Ｐ１　調査区東端の遺構である。直径約 0.45 m、深さ約 0.1 mで、調査区外の北側へ入り込んでいるピットである。遺物は瓦と須恵器が出土している。

不明　Ｐ 24　ＳＤ８内の西北側にあり、長径約 0.3 mの楕円形で深さ約 0.14 mの炭を多く含むピットである。拡張部分のＳＤ８検出面では確認されず、ＳＤ８の埋土掘削中に検出した。性格は不明であるが、ＳＤ８内より検出したことから寺院に関連する遺構の可能性がある。

不明　Ｐ 25　ＳＤ８内の中央東寄りにあり、直径約 0.35 m、深さ約 0.3 mの不整円形のピットである。ＳＤ８の底面より検出した。Ｐ 24 の場合と同様、寺院関連遺構の可能性がある。



第８図　瓦溜り１・２完掘状況

2　出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、そのほとんどが瓦であった。瓦以外には、土師器・須恵器、わずかに石器と鉄器も出土している。出土総量は、コンテナバットで27箱分である。以下に瓦・土器・石器・鉄器の順で概要を述べる。出土遺構は、第２表と図面図版にそれぞれ記した。

A．瓦

瓦の出土量は、コンテナバットで26箱分である。その大部分は、瓦溜りから出土したものである。瓦の種類は、軒丸瓦・丸瓦・平瓦があり、軒平瓦と断定できるものは出土していない。その時代は、飛鳥時代から奈良時代にかけてのもののみであった。丸瓦と平瓦が大勢であり、また軟質のものや摩滅しているものが多い。色調と焼成は、灰白色で焼成不良の個体が多いが、青灰色で良好なものもある。その分類については、平成２年度の発掘調査報告書に従った。

軒丸瓦（図面図版ＰＬ．４、写真図版ＰＬ.23）　今回の調査では、瓦当面が完全に残るものは出土せず、破片のみである。破片は全部で８点出土している。これまでの調査では、飛鳥時代と奈良時代の２時期、２種類の軒丸瓦が出土している。しかし、本調査では、飛鳥時代（広野廃寺創建時）のものしか出土していない。

軒丸瓦の文様は、複弁八葉蓮華文で、中房には１＋８の連子を配す。外縁はゆるやかに立ち上がり、そこへ上下交互に配される二重の鋸歯文が、外縁と花弁の間には一重の圏線がめぐる。瓦当裏面は全体にナデを、外周沿いもナデを施す。また瓦当裏面と丸瓦とを接合する際には、丸瓦端面や凹面に刻みを施し、接合していたことが分かる（ＰＬ．４ － ３）

丸瓦（図面図版ＰＬ．５・６、写真図版ＰＬ.24）　丸瓦は、コンテナバットで11 箱分である。大きく分けて、葺き重ね部分が無段のいわゆる「行基式丸瓦」と葺き重ね部分に段を有する「玉縁式丸瓦」が出土している。行基式丸瓦は、さらに叩きの痕跡によって、Ａ（格子叩き）とＢ（縄叩き）の２種類に分けることができる。

行基式丸瓦Ａは、凸面に格子叩き痕跡のある丸瓦で、叩きの後に回転を利用したナデにより叩き痕を消しているものである。凹面の模骨下端となる部分が未調整のままで、布端の痕が確認できるものがある（ＰＬ．５ － ８～ＰＬ．６ － 13）。

行基式丸瓦Ｂは、凸面に縄目叩き痕跡のある丸瓦で、丸瓦Ａとはやや異なり、叩きの後に縦方向へナデて叩き痕を消しているものもある（ＰＬ．６ － 14 ～ 20）。

玉縁式丸瓦は、破片が２点出土しているが、いずれも玉縁部分の極小片で、図化できなかった。

平瓦（図面図版ＰＬ．７～９、写真図版ＰＬ.25）　平瓦は、コンテナバットで15箱分である。平瓦も叩きの痕跡によって、Ａ（格子叩き）とＢ（縄叩き）の２種類に分けられる。

平瓦Ａは、凸面に格子叩き痕の残る平瓦である。これは、格子の形状によって、さらに正格子と斜格子とに分けることができる。数量的には、正格子の方が圧倒的に多い。双方、叩きの後に短軸に沿って横方向のナデを施し、叩きの痕跡を消していることを確認できるものがある。凹面には、比較的明瞭に布目痕が残り、模骨痕もみられる。側面はケズリ調整によって、平滑に整えられている。（ＰＬ．７ － 21 ～ 28）

平瓦Ｂは、凸面に縄目叩き痕の残る平瓦である。これは、縄目の大きさによって、さらに大と小とに分けることができる。叩き後、短軸に沿って横方向のナデにより叩きの痕を消しているものがある。凹面には布目の痕や模骨の痕がみられるだけでなく、部分的に糸切り痕が残るものもある。側面はケズリによって調整されている（ＰＬ．７ － 30～ＰＬ．９ － 44)。

また、叩き痕跡が全くナデ消されず、凸面全体に長軸に並行した縄目叩き痕が残っているものがある（ＰＬ．７ - 29)。その他、側面が縦方向の縄目叩きによって調整され、成形台の痕が残り、一枚作りによると考えられるものもある。（ＰＬ．９ － 45）

Ｂ．土器

土器の出土量は、コンテナバット１箱分である。土師器・須恵器が出土している。土師器は、器種を特定できるものがわずかであった。須恵器は、坏と甕の破片が多く出土した。飛鳥から奈良時代のものがほとんどで、少量ではあるが古墳時代のものも含まれていた。

土師器（図面図版ＰＬ.10 － 46・47、写真図版ＰＬ.26 － 21・22） 土師器は、皿と鍋の把手が出土している。皿は、口縁部径 9.8cm、器高 2.2cm、焼成は良好で、色調は赤褐色である。体部外面上半から口縁部にかけてと底部内面全体にナデを施し、底部外面には指頭圧痕が残る。口縁部に煤が付着しているため、灯明皿と考えられる（ＰＬ.10 － 46)。

鍋の把手は、残存高 5.3cm・残存幅５cm である。焼成はやや不良で色調は黄褐色である。全体的に摩滅しており、調整は読み取れない（ＰＬ.10 － 47)。

須恵器（図面図版ＰＬ.10 － 48 ～ 68、写真図版ＰＬ.26 － 17 ～ 20） 須恵器は、坏蓋・坏身・盤・壺・平瓶・水瓶・甕が出土している。

坏蓋は、坏身の口縁端部を受ける部分にかえりが有るものと無いものがあり、頂部に宝珠つまみが付く。概して焼成は良好で、色調は浅黄色ないし灰色である。かえりが有る坏蓋には、口縁部径が 14.6cmの比較的小さいもの（ＰＬ.10 - 53）と、18.2cmの大きいもの（ＰＬ.10 - 55）がある。双方、口縁端部外面および内面全体は回転ナデ、外面頂部付近は回転ヘラケズリを施す。

かえりが無い坏蓋にも、口縁部径が 15.8cm の比較的小さいもの（ＰＬ.10 － 54）と、20.5cm・22.4cm の大きいもの（ＰＬ.10 － 56・57）がある。前者は、外面頂部を回転ヘラケズリし、外面の頂部以外と内面全体には、回転ナデを施す。また、外面には自然釉が付着する。後者は、口縁部が下方へ折れるように外反し、明瞭な段を成す。内外面ともに回転ナデを施す。

坏身は、底部に高台が付かないものと付くものがあり、概して焼成は良好で、色調は浅黄色である。無高台の坏身には、口縁部径 13.3cm、器高 3.6cm、底部径 7.8cm で器高に対して底部径が小さいもの（ＰＬ.10 － 59）と、口縁部径 14.2cm、器高 3.9cm、底部径 9.4cm で底部径が大きいもの（ＰＬ.10 － 60）がある。双方、底部をヘラ切りした後は未調整であり、底部外面を除き、内・外面ともに回転ナデを施す。

有高台の坏身には、残存高 2.6cm、高台径 7.8cm で高台径が小さいもの（ＰＬ.10 － 61）と、口縁部径 13.6cm、器高 3.6cm、高台径 9.1cm で高台径が大きいもの（ＰＬ.10 - 62）がある。双方、高台は貼り付け、内・外面ともに回転ナデを施す。

盤は、口縁部径18.6cm、残存高2.7cmで、口縁部から体部上半が残る。焼成は良好で、色調は灰色である。口縁部上端は平坦で、やや外反し、体部は内湾している。内・外面ともに回転ナデを施す。口縁部外面には自然釉が付着する。（ＰＬ.10 - 58）

壺は、壺蓋、長頸壺の肩部、長頸壺の底部、短頸壺の口縁部、耳付き肩部、高台付き底部、糸切り底部の破片がある。概して焼成は良好で、色調は灰色である。

壺蓋は、口縁部径6.7cmで、壺の口縁端部を受ける部分にかえりをもつ。内面は全体に回転ナデを施すが、外面は付着した自然釉により調整が不明である（ＰＬ.10 - 48）。長頸壺の肩部は、最大径16.6cm、残存高5cmである。内・外面の回転ナデ後、下方へ屈曲する部分に２条の凹線をめぐらせ、その下に右上がりの連続ヘラ描き文を施す（ＰＬ.10 - 49）。長頸壺の底部は、残存高3.2cm、高台径9.5cmで、八の字状に開く高台をもつ。内面の回転ナデ、外面の回転ヘラケズリ後、高台を貼り付け、さらに回転ナデをして接合面を整える。底部には、高台貼り付け時に付いた爪跡が残る（ＰＬ.10 - 63）。短頸壺の口縁部は、口縁部径9.9cmである。内・外面ともに回転ナデを施す（ＰＬ.10 - 65）。耳付き肩部は、小片のため法量は不明である。内・外面の回転ナデ後、楕円形の孔をもつ台形の耳を肩部に貼り付けている（ＰＬ.10 - 66）。高台付き底部は、残存高3.2cm、高台径6.4cmである。内・外面の回転ナデ後、底部に高台を貼り付け、さらに回転ナデをして接合面を整える（ＰＬ.10 - 67）。糸切り底部は、残存高２cm、底部径11.2cmである。内・外面の回転ナデ後、回転糸切り技法によって器体を粘土塊より分離し、平底の底部を作り出す（ＰＬ.10 - 67）。

平瓶は、口縁部径9.4cmで、口縁部が残る。焼成は良好で、色調は灰色である。口縁部は若干内湾している。内・外面ともに回転ナデを施す（ＰＬ.10 - 50）。

甕は、外反しながら立ち上がる頸部の破片である。焼成は良好で、色調は灰色である。内・外面ともに回転ナデを施す。内面には当て具による同心円文が、外面には回転ナデによって消えかかった格子ふう叩目文が残る（ＰＬ.10 - 64）。

その他、器種不明の体部が２片ある。双方、焼成は良好で、色調は灰色である。１つは、内・外面の回転ナデ後、外面に２条の凹線をつけ、その間に波状文を施す（ＰＬ.10 - 51）。もう一つも、回転ナデ後、２条の凹線をつけるが、その間と外にも波状文を施す（ＰＬ.10 - 52）。

Ｃ．石器（図面図版ＰＬ.10 - 69、写真図版ＰＬ.26 - 23）

ほぼ完全な形の石棒が１点出土している。長さ20.6cm、幅4.5cm、厚さ3.1cm、その両端部は丸みを帯びている。表裏両面ともに周囲が打ち欠かれ、中心に右肩下がりの擦痕が残る。

Ｄ．鉄器（図面図版ＰＬ.10 - 70～72、写真図版ＰＬ.26 - 24～26）

鉄器は、釘、鉤、鎌がある。釘は、残存長9.2cm、最大厚1.2cm、先細りした断面長方形の鉄棒の端を折り曲げ、頭部とする。先端部が欠損し、一部に木質が付着している（ＰＬ.10 - 70）。鉤は、長さ６cm、最大厚0.6cmで、先が尖った断面長方形の鉄棒をＳ字状になるよう３回折り曲げて作られている（ＰＬ.10 - 71）。鎌は、残存長10.2cm、最大幅2.1cm、最大厚0.6cmで、曲刃鎌の刃先である。先端部分がやや丸くなっている（ＰＬ.10 - 72）。

Ⅳ. まとめ

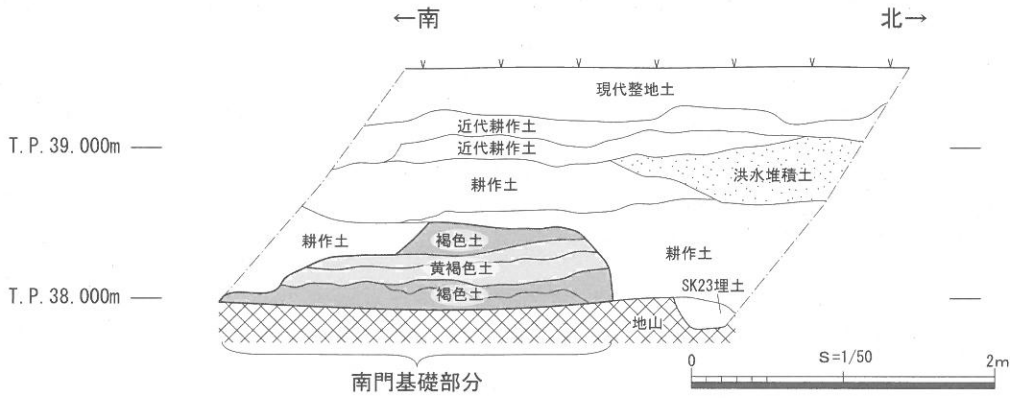
1　調査の成果

今回の発掘調査における主要な成果は、未確認だった広野廃寺の南端を検出したことである。平成２年度の調査で、寺域の西端は判明していたが、他は不明であった。今年度の調査で、西に加えて新たに南端が確定した。

寺域南端の根拠としたのは、調査区北端の東西溝ＳＤ８と拡張部中央で東西に並んだ柱穴列Ｐ20・Ｐ22・Ｐ23が、並行する点である。ＳＤ８から出土した飛鳥時代から奈良時代の遺物群の存在や、Ｐ20北の黄褐色粘質土を柱穴の支え土とする解釈も、上記の遺構状況と矛盾しない。そのことから、ＳＤ８は広野廃寺南端の側溝、柱穴列は広野廃寺南面の掘立柱塀を構成した柱穴列の一部と考えられる。

平成２年度の調査では、西限側溝沿いに掘立柱塀の柱穴列は見つかっていないが、これは調査地における後世の削平が著しいためである。

また、基本層位の項目で述べた通り、拡張部西壁の土層観察から、硬く締まった褐色粘質土と黄褐色粘質土は、広野廃寺南門の基壇土である可能性が高い。西壁の東には、掘立柱塀の柱穴Ｐ22があり、ここまでが塀で、そのすぐ西が南門となる。南限側溝ＳＤ８の西端がここで終わることも、この推測を裏付けると考える。



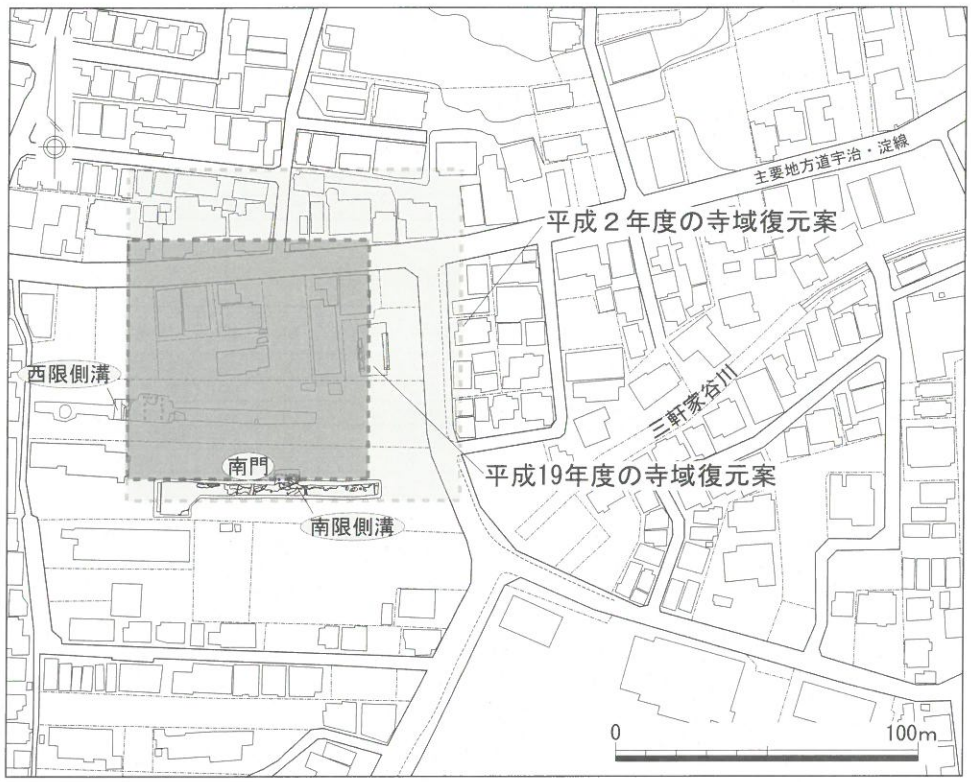
第９図　拡張部西壁断面図

出土遺物の組成は、これまでの調査で出土したものと大きく変わらず、時代的には飛鳥から奈良時代のものがほとんどである。ただし、遺物包含層中からであるが、回転糸切りの痕跡が残る壺底部（ＰＬ.10 - 68）が出土しており、底部糸切り壺が奈良時代末の長岡京期以降に出現することを考慮すれば、これまで８世紀第３四半期と考えていた広野廃寺の廃絶年代に、８世紀第４四半期以降の可能性を考慮して良いかも知れない。また、広野廃寺関連以外では、これまで市域の出土例が無かった縄文時代の石棒（ＰＬ.10 - 69）をほぼ完全な形で検出できたことが、これまで不明であった広野の弥生時代以前の様相を知る手がかりの一つとなるだろう。

2　広野廃寺の寺域

広野廃寺の寺域については、既に平成２年度の報告書中で、西限側溝を基準に地理的特徴を考慮し、１町（約 110 m）四方という復元案が提示されている（宇治市教育委員会 1991）。今回の調査地で、南端が検出される可能性があると予測したのもその復元案に依拠してのことである。そして、実際本年度の調査では、寺域の南限を確認することができた。しかし、推定した南門の位置が伽藍の中心軸線上にあると考えた場合、平成２年度の復元案では規模が合わない。

そこで、西限側溝と今回検出した南限側溝、推定南門位置を基準として新たに、79 m四方と規模を復元した（第 10 図）。この 79 mという数字は、検出した塀柱穴列の柱間隔が 3.16 mであり、それを十分の一にした 0.316 mを基準尺と仮定すると、250 尺に相当する。この復元案も今後の調査によって変動する可能性があり、南門が寺域の中軸上にない寺院もあるが、もう一つの可能性としてここに示しておく。



第10図　寺域復元図

参考文献

粟野　謨　1990 年　「宇治市「広野廃寺」発見の事情」『京都考古』第 56 号

井上満郎・山田良三　1973 年　「２　歴史伝承と古墳」『宇治市史』１　古代の歴史と景観

宇治市教育委員会　1991 年　「７．まとめ」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第 17 集

同上　　2006 年　『広野廃寺発掘調査報告書』宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書 第 61 集

鐘方正樹　1985 年　「宇治市一里山出土の古式円筒埴輪」『京都考古』第 41 号

田辺昭三　1973 年　「１　先土器から稲作へ」『宇治市史』１　古代の歴史と景観

山田良三　1973 年　「５　寺院の造立」『宇治市史』１　古代の歴史と景観

第１表　瓦集計表

遺構名	軒丸瓦	丸瓦														平瓦												不明												総計
		行基式											玉縁式	合計												不明	合計												
		縄叩き								格子叩き		不明				縄叩き						格子叩き		不明	合計	縄叩き								格子叩き		不明	合計		
		縄叩き			縄叩き後ナデ			不明								縄叩き			縄叩き後ナデ			不明							縄叩き後ナデ			不明							
		太	細	不明	太	細	不明	太	細	不明	正格	斜格				太	細	不明	太	細	不明	太	細	不明	正格	斜格			太	細	不明	太	細	不明	太	細	不明	正格	斜格			
ＳＫ１											1		1		2										1	1	1	3											1	1	6
ＳＫ３													1		1													0											1	1	2
ＳＫ５											1		1		2	1								1	1	1	1	5											1	1	8
ＳＫ６						1														1							1	2											1	1	5
ＳＫ７																								1			1	2											1	1	3
ＳＤ８	2	1	1			2				1	1		5	2	13	1	1		1	4				2	4	2	3	18		1		1	1	1			1	1	1	5	12	45
ＳＤ９			1			1					1		2		5		1			1				1	2	1	1	7											1	1	13
ＳＤ10															0										1			1												0	1
ＳＤ13													1		1					1					1		1	3											1	1	5
ＳＤ16						1					1	1	1		4					1					1		1	3		1									1	2	9
ＳＫ18	1												1		1													0											1	1	3
ＳＤ19						1					1		1		3					1				1	1		1	4											1	1	8
ＳＤ20						1							2		3		1			1				1			1	4		1									1	2	9
ＳＤ22						1							1		2												1	1											1	1	4
ＳＫ24	1					1				1	1		1		4		1		1	1				1	1			5				1							1	2	12
ＳＫ25	3					4	1			2	2		11		20	1			2	23	2		1	1	2	2	8	42				1							2	3	68
Ｐ１															0													0											1	1	1
Ｐ11															0												1	1											1	1	2
Ｐ23													1		1					1							1	2											1	1	4
Ｐ24															0									1				1											1	1	2
包含層	2		1		1	1				1	1	1	3		9				1	2		1		1	1		1	7		1							1	1	1	4	22
不明													1		1				1	1				1			1	4											1	1	6
合計	9	1	3	0	1	14	1	0	0	5	10	2	35	2	74	3	4	0	6	38	2	1	1	12	16	7	25	115	0	4	0	1	3	1	0	0	1	2	2	26	40	238

第２表　掲載遺物一覧表

図面番号	写真番号	器質	器形	出土遺構	残存率	備考
ＰＬ．４－１	ＰＬ．23－１	瓦	軒丸瓦	瓦溜り２(SK25)	瓦当58%	
ＰＬ．４－２	ＰＬ．23－２	瓦	軒丸瓦	SK18	瓦当23%	
ＰＬ．４－３	ＰＬ．23－３	瓦	軒丸瓦	南限側溝(SD8)	瓦当31%	
ＰＬ．４－４	ＰＬ．23－４	瓦	軒丸瓦	遺物包含層	瓦当8%	
ＰＬ．４－５	ＰＬ．23－５	瓦	軒丸瓦	瓦溜り２(SK25)	瓦当7%	
ＰＬ．４－６	ＰＬ．23－６	瓦	軒丸瓦	瓦溜り２(SK25)	瓦当6%	
ＰＬ．４－７	ＰＬ．23－７	瓦	軒丸瓦	遺物包含層	瓦当22%	
ＰＬ．５－８	ＰＬ．24－８	瓦	丸瓦	瓦溜り２(SK25)		
ＰＬ．５－９	ＰＬ．24－９	瓦	丸瓦	瓦溜り２(SK25)		
ＰＬ．５－10	ＰＬ．24－10	瓦	丸瓦	南限側溝(SD8)		
ＰＬ．６－11		瓦	丸瓦	遺物包含層		
ＰＬ．６－12		瓦	丸瓦	瓦溜り２(SK25)		
ＰＬ．６－13		瓦	丸瓦	瓦溜り２(SK25)		
ＰＬ．６－14		瓦	丸瓦	瓦溜り２(SK25)		
ＰＬ．６－15		瓦	丸瓦	瓦溜り２(SK25)		
ＰＬ．６－16		瓦	丸瓦	南限側溝(SD8)		
ＰＬ．６－17		瓦	丸瓦	南限側溝(SD8)		
ＰＬ．６－18		瓦	丸瓦	遺物包含層		
ＰＬ．６－19		瓦	丸瓦	瓦溜り２(SK25)		
ＰＬ．６－20		瓦	丸瓦	瓦溜り２(SK25)		
ＰＬ．７－21		瓦	平瓦	南限側溝(SD8)		
ＰＬ．７－22		瓦	平瓦	瓦溜り２(SK25)		
ＰＬ．７－23		瓦	平瓦	瓦溜り２(SK25)		
ＰＬ．７－24	ＰＬ．25－13	瓦	平瓦	瓦溜り２(SK25)		
ＰＬ．７－25		瓦	平瓦	南限側溝(SD8)		
ＰＬ．７－26		瓦	平瓦	瓦溜り２(SK25)		
ＰＬ．７－27		瓦	平瓦	SK5		
ＰＬ．７－28	ＰＬ．25－14	瓦	平瓦	瓦溜り２(SK25)		
ＰＬ．７－29	ＰＬ．25－11	瓦	平瓦	雨落ち溝(SD16)		
ＰＬ．７－30	ＰＬ．25－12	瓦	平瓦	瓦溜り２(SK25)		
ＰＬ．８－31		瓦	平瓦	瓦溜り２(SK25)		
ＰＬ．８－32		瓦	平瓦	南限側溝(SD8)		
ＰＬ．８－33		瓦	平瓦	瓦溜り１(SK24)		
ＰＬ．８－34		瓦	平瓦	瓦溜り２(SK25)		
ＰＬ．８－35	ＰＬ．25－15	瓦	平瓦	瓦溜り２(SK25)		
ＰＬ．８－36		瓦	平瓦	瓦溜り２(SK25)		

図面番号	写真番号	器質	器形	出土遺構	残存率	備考
ＰＬ．８－37		瓦	平瓦	瓦溜り２(SK25)		
ＰＬ．９－38		瓦	平瓦	瓦溜り２(SK25)		
ＰＬ．９－39		瓦	平瓦	遺物包含層		
ＰＬ．９－40		瓦	平瓦	南限側溝(SD8)		
ＰＬ．９－41		瓦	平瓦	SD20		
ＰＬ．９－42		瓦	平瓦	南限側溝(SD8)		
ＰＬ．９－43		瓦	平瓦	南限側溝(SD8)		
ＰＬ．９－44	ＰＬ．25－16	瓦	平瓦	SK5		
ＰＬ．９－45		瓦	平瓦	瓦溜り２(SK25)		
ＰＬ．10－46	ＰＬ．26－21	土師器	皿	南限側溝(SD8)	口縁95%	煤付着、灯明皿
ＰＬ．10－47	ＰＬ．26－22	土師器	鍋	遺物包含層		把手
ＰＬ．10－48		須恵器	壺蓋	遺物包含層	口縁13%	
ＰＬ．10－49		須恵器	長頸壺	遺物包含層		
ＰＬ．10－50		須恵器	平瓶	南限側溝(SD8)	口縁5%	
ＰＬ．10－51		須恵器	不明	P1		波状文
ＰＬ．10－52		須恵器	不明	SD13		波状文
ＰＬ．10－53		須恵器	坏蓋	雨落ち溝(SD16)	口縁9%	
ＰＬ．10－54		須恵器	坏蓋	遺物包含層	口縁40%	
ＰＬ．10－55		須恵器	坏蓋	SK7	口縁5%	
ＰＬ．10－56		須恵器	坏蓋	南限側溝(SD8)	口縁11%	
ＰＬ．10－57		須恵器	坏蓋	南限側溝(SD8)	口縁18%	
ＰＬ．10－58		須恵器	盤	遺物包含層	口縁6%	
ＰＬ．10－59	ＰＬ．26－17	須恵器	坏身	南限側溝(SD8)	口縁12%	
ＰＬ．10－60		須恵器	坏身	遺物包含層	口縁14%	
ＰＬ．10－61	ＰＬ．26－18	須恵器	坏身	雨落ち溝(SD9)	口縁41%	
ＰＬ．10－62	ＰＬ．26－19	須恵器	坏身	SK1	口縁15%	
ＰＬ．10－63		須恵器	壺	P1	高台40%	
ＰＬ．10－64	ＰＬ．26－20	須恵器	甕	雨落ち溝(SD16)		
ＰＬ．10－65		須恵器	短頸壺	南限側溝(SD8)	口縁13%	
ＰＬ．10－66		須恵器	壺	南限側溝(SD8)		耳付壺
ＰＬ．10－67		須恵器	壺	雨落ち溝(SD9)	高台15%	
ＰＬ．10－68		須恵器	壺	遺物包含層	底部11%	底部糸切り
ＰＬ．10－69	ＰＬ．26－23	石器	石棒	雨落ち溝(SD9)		ホルンフェルス
ＰＬ．10－70	ＰＬ．26－24	鉄器	釘	SD20		
ＰＬ．10－71	ＰＬ．26－25	鉄器	鉤	遺物包含層		
ＰＬ．10－72	ＰＬ．26－26	鉄器	鎌	南限側溝(SD8)		

B. 東中遺跡(菟道段ノ上20－1他)発掘調査報告

Ⅰ．はじめに

1　報告の目的

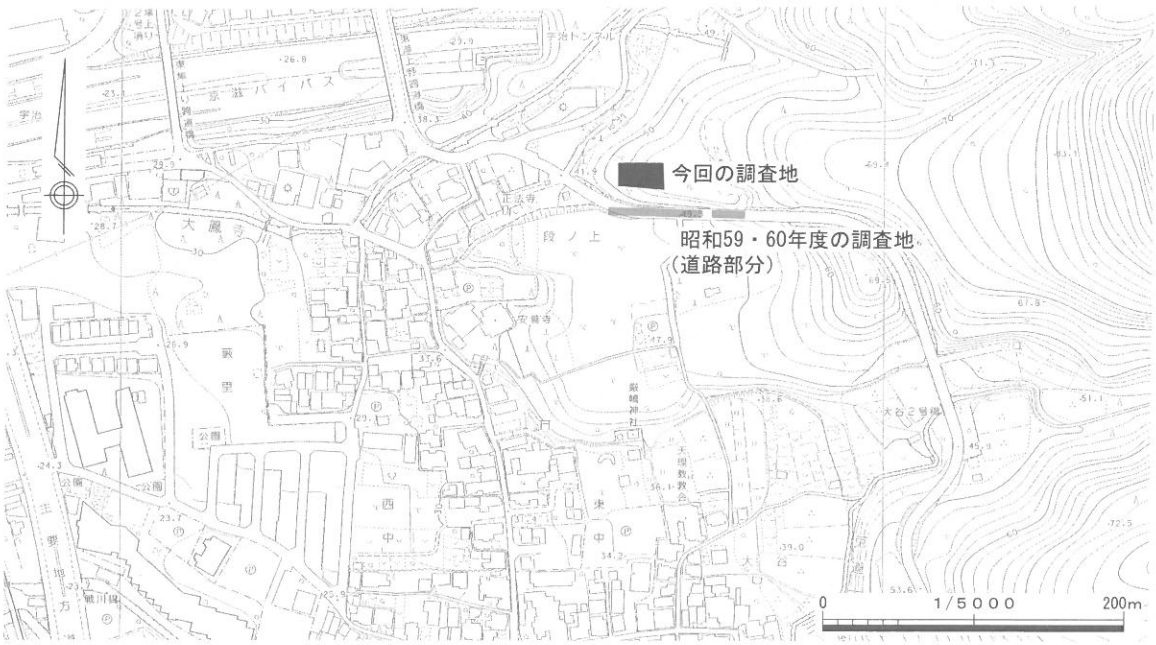
本発掘調査報告は、宇治市菟道段ノ上 20-1・21-1・22-1・23-1 番地で計画されたグループホーム建設に先立ち、宇治市教育委員会が実施した発掘調査の内容と成果を報告するものである。

2　調査に至る経過

平成 19 年 5 月 17 日付で医療法人栄仁会理事長奥宮祐正より、東中遺跡の範囲にある上記の番地において、文化財保護法第 93 条第 1 項の規定に基づき、グループホーム建設を行う旨の埋蔵文化財発掘の届出が提出された。当該地付近では、本市が昭和 59・60 年に隣接地で発掘調査を行い、古代から近世の遺構が出土している。今回の開発は、建物部分が地表面より最大約 2m 掘削され、遺構が壊滅する恐れがあった。そのため、建物の範囲に合わせて発掘調査を実施した。

3　調査の経過

調査前の当該地は竹林で、その北端と西端付近には高さ約 50cm の石垣が存在し、調査地の南西端より外側には瓦片が散布していた。石垣の内側は、周囲に比べ若干高かった。調査は 7 月 24 日に調査区の設定を行い、翌日から重機掘削を始めた。掘削深度は平均して遺構面までの約 30cm である。遺構は全て地山から掘り込まれていた。31 日に遺構検出状況の写真撮影を行い、以後遺構掘削をすすめた。掘削は 8 月 8 日に完了し、翌日全体の写真撮影を行った。盆休みの後、16 日より機材の撤収と測量を始め、21 日に全作業が終了したことを確認し、撤収した。



第 1 図　調査地位置図

Ⅱ．地理的・歴史的環境

1　東中遺跡の地理的環境

東中遺跡は、宇治川谷口部右岸の菟道（とどう）地区に位置する。地形的にみると、宇治川に平行して南北に連なる標高約300mの丘陵より西に伸びる支尾根上に東中遺跡があり、その先端近くの平坦面に飛鳥から奈良時代を中心とした遺構の多くが存在する。遺跡の位置する支尾根の南北には、それぞれ別の支尾根が丘陵より西に伸びている。また、遺跡東方の丘陵を背に西を見れば、住宅地の間に宇治川や巨椋池干拓地を眼下に眺望し、さらに遠く八幡市の男山丘陵や向日・長岡京市、大山崎町方面の山々まで望むことができる。

2　菟道の歴史的環境 - 菟道地区の遺跡 -

菟道地区における人間活動の黎明は、2007年度の調査で宇治川沿いの**乙方遺跡**より出土した縄文時代草創期の有舌尖頭器によって、１万年以上前まで遡ることがわかってきた。遺構を伴った最も古い生活の痕跡は、同じく乙方遺跡より見つかった弥生時代中期の集落跡に残っている。続く弥生時代後期には、乙方遺跡北東の丘陵上に高地性集落の**羽戸山遺跡**が営まれた。

古墳時代の遺跡としては、中期の**菟道遺跡・西隼上り遺跡**といった集落跡があり、後者からは中期の埴輪窯跡も１基見つかっている。宇治川の谷口部右岸、丘陵頂部の**観音山古墳**は、前期の築造と推定され、中期には円墳と方墳ないし円墳２基からなる**二子山古墳**が、後期には**門ノ前古墳**が築かれる。また、乙方遺跡からは後期の土壙墓を検出した。

飛鳥から奈良時代の集落遺跡としては、掘立柱建物群からなる**東中遺跡**や竪穴住居からなる乙方遺跡を発掘している。この時期の菟道には、多くの窯跡が築かれる。飛鳥の豊浦寺に供給した**隼上り**、それと同笵の瓦を焼いた池山、大鳳寺に瓦を供給した**山本瓦窯**のほか、**山本窯**や**滋賀谷窯**などの須恵器窯も存在した。また、寺院としては、法起寺式伽藍配置の**大鳳寺**が建立された。墳墓には、**隼上り古墳群**や**谷下り古墳群**といった飛鳥時代の古墳群があり、奈良時代には、**妙見古墓**が二子山古墳の東側、南斜面に単独で造られ、須恵器製の蔵骨器内に火葬骨を納めてあった。

菟道の谷奥部に位置する三室戸寺は、平安時代には存在したと考えられているものの、当時の様相は判然としない。鎌倉時代には、三室戸寺境内に瓦窯や菟道遺跡の土壙墓などがある以外、生活の痕跡は不明瞭である。瓦窯以外に三室戸寺周辺では、室町時代の庭園跡といった三室戸寺子院の一部を発掘しており、**三室戸寺子院跡**となっている。

安土桃山時代の遺構には、東中遺跡より銅銭や土師器を伴った火葬墓が出土したほか、昨年度に乙方遺跡の調査で偶然発見した**宇治川太閤堤跡**が注目を集めた。乙方遺跡の南部は、江戸時代に瓦師山田源左衛門の窯場があり、調査では瓦造りにともなう粘土採りの土坑を検出した。また、大鳳寺跡東方の丘陵上、菟道遺跡の東端では、江戸時代末頃の宅地跡を発掘しており、今回の東中遺跡での調査結果と比較した場合、その立地・年代ともに共通性が認められる。

Ⅲ．調査の成果

1　検出遺構

今回の調査で検出した遺構は、全て地山から掘り込まれていた。埋土は基本的に１層である。年代推定の困難なピットを除くと、東西南北に走る溝等、遺構の多くは宅地跡に伴うものである。

建物跡　ＳＢ１　東西方向の溝ＳＤ３・５、南北方向の溝ＳＤ８・17によって区画された東西14.4ｍ、南北6.4ｍの建物跡である。東西溝ＳＤ４が、建物の中心付近をやや南寄りに貫いている。また、南北溝ＳＤ８を基準に東へ1.4ｍ間隔で並ぶＳＤ９からＳＤ16までの南北溝８条を、建物跡内部より検出した。溝の埋土は、東西･南北の溝ともに褐色ないし黄褐色の粘質土であり、埋土の平面および断面の観察結果から、東西・南北の溝は、それぞれほぼ同時に埋没していったことが判明した。上記溝の内、ＳＤ３・４・10・15・17からは、近世の陶磁器片が出土しており、建物跡もそれと同時期のものと考えられる。

東西溝　ＳＤ１・６　ＳＤ８に接して東西に伸びる２条の溝である。埋土の観察から、ＳＤ８との先後関係が認められないこと、近世の陶磁器片が出土していること、ＳＢ１と並行することから、双方ともにＳＢ１を含む近世の宅地造成の際に造られたものであろう。

土坑　ＳＫ１　直径約２ｍ、深さ約0.5ｍの地山を掘りぬいた円形の土坑である。内部は厚さ10cmほどの叩き土によって固められており、水溜めなどに使われたものの可能性がある。埋土中から近現代のガラス瓶などの他、近世の泥面子が出土した。

土坑　ＳＫ２　長軸4.5ｍ、短軸0.8ｍ、深さ0.3ｍの南北に長い土坑である。南端が建物のほぼ中心に位置していることから、大黒柱を立てる際に一旦ここに柱を収めてから、縄を柱の北側にかけ、ＳＫ２の南側より縄を引き、柱を起こすことに使われたものであろう。

2　出土遺物

出土した遺物は、コンテナバット１箱分である。遺物のほとんどは、近世の陶磁器であった。その他、土師器や須恵器、布目瓦の砕片なども出土したが、総じて図化に耐えないものである。

泥面子　直径3.1cm、厚さ１cm。素焼きの泥面子である。表面には、「岩」の字が認められる。泥面子の中でも、円形の面に紋様を施すいわゆる面打である（第２図－１）。

磁器　皿　高台径2.5cm、残存高0.7cm。高台を有す小型皿の底部である。内外面ともに白色釉を施している（第２図－２）。

磁器　紅皿　口縁部径4.4cm、残存高1.2cmの紅皿である。外面には放射線状の刻み目を付け、内外面ともに白色釉を施している。高台の有無は不明である（第２図－３）。

磁器　碗　口縁部径8.8cm、残存高4.2cmの染付けを施した端反碗である（第２図－４）。

矢　残存長2.7cm、厚さ0.8cmの矢の沓巻部である。木製の矢軸に銅製の筒をかぶせ、その上から糸などを巻きつけたことが筒に残された筋状の痕跡から知れる（第２図－５）。

Ⅱ．地理的・歴史的環境

宇治市街遺跡は、宇治川の東岸（川東地区）と西岸（川西地区）の広範囲に展開する集落遺跡である。特に川西地区は、古代から近世まで宇治の中心的な役割を果たし、この範囲は現在でも宇治の中心という位置づけに変わりは無い。既往の調査では、平安時代の別業や街区整備に伴う道路や区画溝の跡などを検出している。この内、今回の調査成果と関係の深い道路遺構については平成10年度の調査で、区画溝は平成11年度の調査で見つかったものである。

Ⅲ．調査の成果

今回の調査地は、平成11年度調査地の南東約50ｍに位置する。Ａトレンチは東西3.5ｍ、南北２ｍと設定し、掘削を行ったが、遺構・遺物ともに認められなかった。そのため、Ａより東に約５ｍ離れた地点で東西６ｍ、南北３ｍのＢトレンチを設定した。Ｂの層序は、約30cmの表土、約30cmの中世遺物包含層（オリーブ褐色）、遺構面が展開する地山（黄褐色）であった。

Ｂトレンチでの検出遺構は、溝、土坑、柱穴である。また、遺物はコンテナバット約１箱分出土している。主にＳＤ02および包含層から出土している。古代から中世のものである。

ＳＤ02はＳＤ03と平行する東西方向の溝である。規模はＳＤ02が幅約40cm・深さ約10cm、ＳＤ03は大半が調査区外のため全体の確認には至っていない。出土遺物は細片が多く、時期の判定できる遺物は、ＳＤ02出土の瓦器片１点のみである。この瓦器片からＳＤ02は平安時代後期の溝と思われ、直交する平成11年度調査地のＳＤ11・12の時期とも合致する。

検出したＳＤ02は、中宇治地区の街区形成の一端を担う伍町通から約260ｍという距離にあり、伍町通とほぼ平行する。これらのことからＳＤ02は、平成11年度調査地のＳＤ11･12とあわせて、平安時代後期の邸宅遺構の区画を形成する区画溝であった可能性が考えられる。

Ⅳ．まとめ

宇治市街遺跡における街区の整備は、これまでの発掘調査成果により、平安時代後期（11世紀後半）頃より行われた可能性が考えられている（宇治市教育委員会1999、2000）。今回検出した溝ＳＤ02は、非常に狭い範囲での発掘であったため、確かなことは言えないが、街区整備を平安時代後期に想定した上記の見解を支持するものと言えるだろう。

参考文献

宇治市教育委員会　1999年　『宇治市街遺跡発掘調査概報』宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第44集

同上　2000年　『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第48集